

■ 修士論文要旨

生活世界の協働を形づくる制度化の研究

— 心の習慣を視点にして —

A Study on Institutionalizing Living World based on Collaboration (s)

— from a perspective of the Mores —

神奈川大学大学院 経営学研究科
国際経営専攻 博士前期課程

萩原 富夫

HAGIWARA, Tomio

■ キーワード

生活世界、心の習慣、協働行動、儀礼、制度

本来、われわれの生活に身近であるはずの制度が、過去の歴史的経験によることと日常の制度の存在をあまりにも自明視することで疎遠になっていると思われる。前者は戦後の高度経済成長期に行政主動の制度化が行われたこと、後者はその影響によって市民の間に私化現象が生じてきたことによるとと思われる。

以上の問題を受けて、生活から希薄になった制度をわれわれの日常の世界に取り戻すために、制度はどのようにして生み出されてくるのか。そして制度が生み出されてくる過程でわれわれはどのような存在として制度と向き合うことになるのかを理解する。市民社会の社会的実在である制度、その形成のプロセスを研究することが本稿の目的である。

研究を進めるための概念として“心の習慣”を利用する。心の習慣は文化やパーソナリティそして儀礼や儀式などの社会習慣と関係している。関係するこれらの事柄が制度の構成要素であり、われわれの生活と密接不可分に関連している。制度

と社会習慣との関連要件として直ぐに気づくことは、一定の過程を経て成立してくるという性質が類似している。と同時に日常の世界を離れては考えられないということでもある。すなわち、協働生活の中から生まれてくると言えそうである。

心の習慣は日常の平凡な心の中に住まっている。隣人との協働行動に移行する時その行動を支援する働きをもっている。協働行動の習慣化を助ける働きがある。協働行動の習慣化している姿を観察すると、習慣化が協働行動から類型化された活動とその意味を生み出していることが見られる。習慣化を支えているのが心の習慣である。活動とその意味はやがて対象化された存在になる。協働で対象化されたものは対象化を行った者達に返される。ここに協働に基づく制度化の姿がある。個人が如何に時間をかけて習慣を継続しても個人の範囲を出るものではない。制度は協働行動のなかに埋め込まれている。

協働に基づく制度化について改めて、戦後の経済成長の過程を考えると、協働が成長過程の

内側から構造化されていたとは思われない。協働という単なる枠の中に集められた人々であり、心の通わぬ機械の関係として存在するに過ぎなかった。その実態が自然破壊や公害、今日では心を閉じてしまい協働すら忘れてしまうような私化現象を引き起している。しかし、劣悪な社会環境の中で、心の習慣を支えとして互いの心を通い合わせ協働を創る人々が存在する。

協働を意図的に創る活動のなかに心の習慣が存在する。生活の中で相互に働き掛け合い、その持続的展開によって、一種の儀礼としての行動を創り上げた人々がいた。行動とその意味が対象化されて協働行動の参加者を自律した存在に押し上げていく。ここに制度化のプロセスがもつ重要な意味がある。

1960年代に、沼津、三島、清水の二市一町に突然告げられた石油コンビナート建設の話がある。住民運動のモデルとされている。隣人と共に謙虚に学ぼうと持続する姿勢が反対運動を成功に導いた。建設反対の知識を得るため町内全域に学習の輪が忽ちに広がった。学びを協働行動にした原因はこの町で隣人と共に生きるという強い思いであった。老若男女全員が自ら直接体験してでもいるかのように感覚を研ぎ澄まして学び、研究し、公害に汚染された地域の現地調査を行う。隣人同士共通の理解を得よう学びあい教えあいする協働活動を持続的に続け、ついに、反対運動を成功に導く。長い学びの過程の協働行動は一種の儀礼にまで高められ、そこには心の習慣に支えられた住民の信頼の絆が戦いの生活を形作ったのであった。

一方は、大阪天王寺区上六に終戦と同時に住み着き協働行動を展開した住民があった。この不法占拠者達の地権獲得までの25年間に、儀礼にまで高めた活動を見ることができる。話が特に注目を集める理由は、住民全体が互いに協働行動を盛り立てていく決意をその行動を通じてもったことである。市から立ち退きを命ぜられ、自らの生活を成り立たせるためには隣人との協働が必要とされた。取水栓2つしかない荒野である。

住み始めのころは、相互にいがみ合ったり、外から妨害されたり安定しない。しかし、立ち退きを迫られることと生活の苦難が生活の協働を創り上げ、心の習慣に支えられた堅い協働行動を基にして町の景観が整えられていく。インフラの整備は全て住民の手で行われ、行政を押し退けていった。町が整っていくと、町を破壊されない活動が必要となる。その活動がまた住民一人ひとりを創り上げていった。不寝番と言う活動を一日も休まず27年間も続けたという。この行動に彼らが創り、守った制度があった。

以上の二つの協働行動から、心の習慣、協働行動、儀礼、制度との関係を研究することができた。二つの協働行動は長期間持続し、その過程で互いの心を許しあい響きあいを続けられたところに認知的作用が観察される。協働行動を続けながら、協働行動に動かされていく。しかも、当事者としてである。協働の中のある種の行動が類型化していくのは意味の相互認識の成立である類型化された事柄が今度は参加当事者を自律へと導いていく。ここに制度の存在価値があると思うのである。制度化への過程には、儀礼が現れている。身近に行われる祭をその当事者として考えてみるだけで、容易に理解されよう。心の習慣と協働行動が生み出す意味の存在を認知できない制度は制度ではないのではなからうか。制度は市民のために、市民の生活の中から生み出されてくる存在である。